令和5年度　アーチル基礎講座

発達障害児者支援の基本的な考え方

～家族を支える～

仙台市発達相談支援センター
奈良　千恵子

COI開示

発表内容に関連して、開示すべき
COI関係等にある企業等はありません

- 症例は個人が特定されないよう、複数症例をもとにアレンジされております。

生涯ケア

本人・家族の「こうありたい」という願い（ニーズ）の実現を目指して

- 特性は障害にわたるからこそ

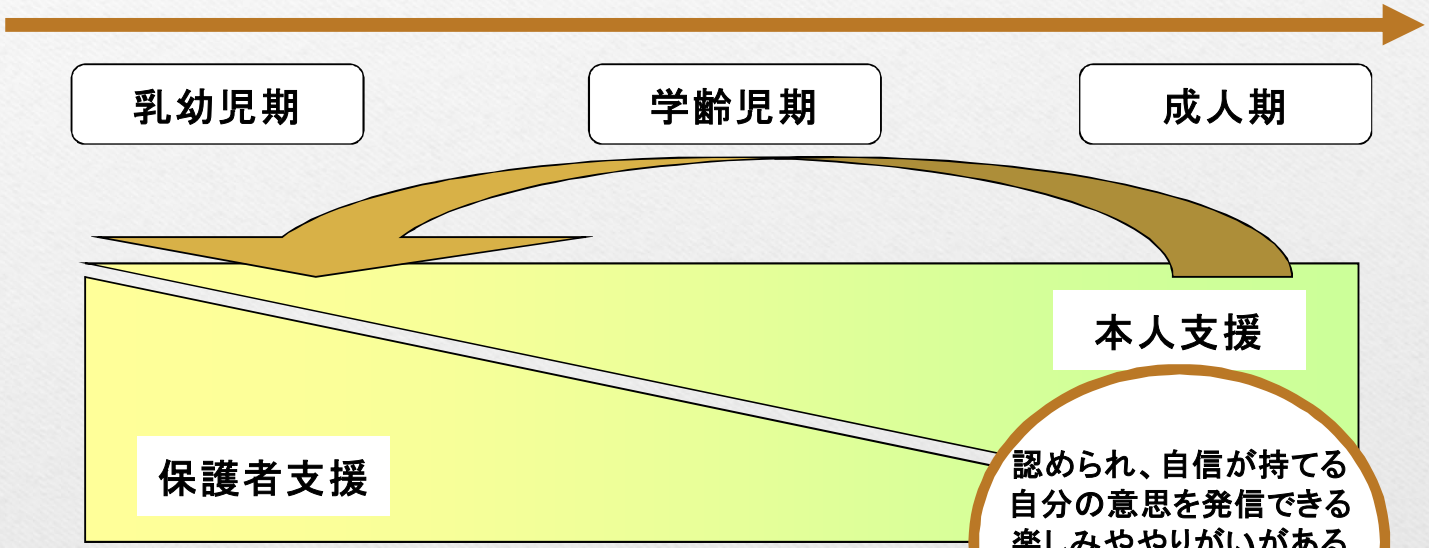
  「切れ目のない一貫した支援」が必要

- 本人、家族を中心に、保健・医療・福祉・教育・労働・・様々な分野における支援者の連携が必要

- たとえ障害があっても、地域の中で当たり前の暮らしができるように（自律・社会参加）

将来の「自立した生活」を見据えて
～支援の基本的な考え方～

「成人期の自立」が目標



認められ、自信が持てる
自分の意思を発信できる
楽しみややりがいがある
信頼できる人がいる
安心できる場がある

「自立」とは・・・

自分の望む生き方を、自分なりに決定し、
必要に応じて周りの手助けももらいながら、実現していくこと

家族を支える（1）

保護者(家族)の支援ニーズのアセスメントと

「今できることから」の支援

家族の支援のニーズとは？

- 保護者が口に出して言う要望は、必ずしも「ニーズ」とは限らない
- 本人主体と思って、本人の言葉を実現させることが必ずしも「ニーズ」の実現に役立つとは限らない

↓

本人の発達特性や家族環境に関する情報、社会環境（学校、 職場等）に関する情報の収集とアセスメントが重要

“客観的評価指標、事実に基づいた本来のニーズの把握”

家族環境のアセスメント

- 家族の心身の健康状態
- 生活環境、経済状態
- 家族成員の関係性：

  両親の関係性、養育方針の不一致、祖父母の理解、

  きょうだい児の状況　（愛着形成の問題、優等生を演じるなど）
- 保護者の養育力、これまでの養育状況

現在の状況

これまでの状況

特に、ネグレクト、心理的虐待の場合、保護者にその自覚はなく、幼児期の教育機関からの情報が重要となることが多い。

- 多面的な情報収集を心掛けることが必要

  来談者の主観、視点が入っていることに留意

  保護者の気持ちにより沿いながら傾聴、情報収集

保護者との関係性がとれ、連携の承諾が得られ、他機関との連携がとれるようになり、ようやく正確な情報がつかめることも多い

保護者のアセスメント

- 保護者の特性の理解
  - 発達特性：ASD（自閉スペクトラム症）、ADHD、境界知能
  - 精神疾患
    - うつ病、不安障害、パニック障害
    - 統合失調症、人格障害etc.
- 第一子がASD（自閉スペクトラム症）の場合
  - 母性は児に合わせて形成される
- 保護者の育ちへの理解
  - 被虐待歴
- 保護者の障害受容の段階

適切な支援があれば
3分の2は連鎖しない！

“世代間連鎖”
子ども時代に虐待を受けた被害者が、
自分の子供に対して虐待を行う確率は3分の1
普段は問題ないが、精神的ストレスが高まった
場合に虐待を行う確率が3分の1

Oliver JE. Am J Psychiaty 1993

虐待の意識なくネグレクト状態となっている家庭の増加

「愛着」とは、無条件に人を信用する力

- 愛着障害は1歳前後の保護者のかかわり方
- 何の気なしに始めたメディア子守がエスカレートして、言葉の遅れや対人関係の障害など、愛着形成不全からくる異常を呈する児が増加している。
- 睡眠リズムを整えること、メディア子守をしないことの重要性をくり返し伝えていく必要がある。
- 子育て支援機関との連携が必要

保護者のメンタル状況に合わせた支援

抑うつ状態の自閉スペクトラム特性の母

児とのやりとりが苦痛、児の多弁多動が苦痛

→反応を返すことができずネグレクト状態

しつこく母とのやりとりを求める児との悪循環

→　母に過剰な負荷がかからないよう、福祉サービスを入れて物理的に離れることができる時間を増やす。

母には読み聞かせなど具体的な支援を提案し、達成できていることへの気づきを促し、育児への自信を取り戻せるように支援

幼稚園との連携で母親役を設定し、愛着形成をはかり、児の行動を安定化させる。

家族の支援ニーズ

- 親自身や同胞である兄弟自身の抱えるニーズに寄り添い理解しながら、障害のある子どもとのかかわりの中で、家族の成員全てが適応的な生活を送れるように、その時々の状態に合わせて支援していく必要がある。

「発達が気になる幼児の親面接」より

- 子どもの療育を二の次にせざるを得ない事情を理解する

  家族全員が同じきもちではない。

  家族が支援者に求めるものは何か。

今できるところからの支援

- まずその家族の事情を理解し、家族がその問題に取り組むのを支援する
  “寄り添う姿勢、共感、傾聴”
  “保護者の苦労をねぎらうところから”

- 家族に余力ができ、子どもの事を考えるゆとりができるまでは、家族を見守り、家族に負担をかけない範囲で、子どもの発達支援を工夫する。

“今できるところからの支援”　（中田、井上ら）
保護者が成功体験を得られるよう実行可能な内容を提案することが大切

- 子どもの療育を二の次にせざるを得ない事情を理解する。

保護者にかかわれない事情がある間、周囲の支援者により児の療育をすすめることで児の発達を促す。これにより保護者がかかわりやすい状況が生まれ良い循環に

- 中等度知的障害を伴う自閉スペクトラム症、支援学校1年男児
- 主訴：こだわりがひどく、癇癪がひどい。
- 家庭状況：同胞なし、両親ともにうつ病。ヒステリックに叱ることで悪循環に
- 不適切なかかわりによりこだわり行動が非常に増加しており、パニックが頻発している。
- 要求はクレーン、指差し、発声、単語、感覚遊びのレベル。孤立型であり学校での他児とのトラブルはないが、マイルールから外れると泣いてしまう。

幼児期に適切な支援が入っていなかったため、
療育の遅れが見られる状況

方針：両親には早寝早起きのみ依頼

支援学校と連携、視線を合わせる練習、共同注意を育むアプローチを学校で進めていただく

放課後ディサービス、ショートスティを利用し、保護者の負担の軽減するとともに、適切なかかわりを増やす

経過：睡眠リズムが整い、適切なかかわりが増えることで、児の癇癪は軽減。行動のレパートリーが増えるにつれ、生活の支障になるこだわり行動も軽減。

療育がすすむにつれ、学校で教えられたことを家庭でもできるようになり、望ましい行動にかかわるという保護者の適切なかかわりが増えてきた

適切な支援が入ることで児の発達が促され、
保護者がかかわりやすい状況が生まれた。

支援の専門性とは？

- 適切な発達の最近接領域を見極めること
  いま、獲得可能なことか、
  まだ獲得不可能なことか？　（本田秀夫）
- 発達の最近接領域
  自力では到達できないが、他者の援助があれば問題解決が可能な水準　（ヴィゴツキー）

スモールステップ

本人支援も保護者支援も考え方は同じ
保護者支援の最近接領域を見極める

気づきの段階での支援

- 寄り添う姿勢と共感・傾聴
  - ⇒　子どもや家庭環境に対するアセスメント
  - ⇒　”今できることからの支援“の実行

方向性

中長期
目標

短期目標
と手立て

具体的ア
ドバイス

保護者の精神状態や家庭環境に留意して、
保護者が成功体験を得られるよう
実行可能なレベルから提案していく

スモールステップ